

Short Story & Poem

# 眠る傍ら



恋詩 Vol. 2

つたの 栞

はじまり

---

そばにいと

くすぐったくなる 優しいきもち

ふれられたら

波紋を広げて 染み入る体温

他二ハ

ナニモ イラナイ

だって この恋は産まれたばかり

まだ 新鮮なもの



『哀よ 愛へ

こころ放ち

ひと風の

思い出へ』

## 春雨

---

清々しき青嶺（あおね） 彩（いろ）ふ

大地満ち溢るる 香草

天つ水 静穏に

土面（つちも）へと 捧ぐ

張り詰めた想ひを

芳（かぐわ）しく 弛ます 春

慕情に揺蕩（たゆと）ひ

飽ひた緑さへ 艶照りまとひ

凍れる瞳 ゆうるりと溶け

陽光に応へ 輝き 流るる

想（そう）

一 滴（ひと しずく）

## ひとめぼれ

---

何気ない この場所に

舞う桜の花弁を透かすほど

鮮やかな光が煌いた

この胸の高鳴りが あなたに届くより早く

私

あなたのすべてを知りたい

## 紅灯緑酒

---

降り注ぐ光と 騒々しい声音

柔らかな灯と 穏やかな音楽

どちらの場所も選べる ひとりの夜

慣れた店に残る苦い思い出が 新しい居所を探させる

翳る心とは裏腹に 賑わう店の扉を開けた

光が眩しいほど

影は 薄くなってくれる

## イラストポエム[鷹]

---



『雲よ 風よ

捕らえようと 逃そうと

後悔する愛を 笑うがいい』

## ひみつ

---

私の『ひみつ』は

「ミツバチがつくる蜂蜜」の 『蜜』  
人に知られたくない 甘いこと。

でも ちょっとだけ 誰かに惚気たくなる 秘蜜。

ちょっと切なくて とっても甘い  
隠し ごと。



うたたね

---

目覚めて初めて

うたたねをしてたと 気づく

頭が 少し痛い

悪い結果が分かっている

心地良い誘惑には いつも勝てない

身を ゆだねたい

甘やかしてくれるものに

あなたなら 最高だったけど

戻らない今は

涙でも 構わない

泣きながらも

いつの間にか堕ちる眠りは

とても 心地が良い...

## 月光浴

---

満月の夜は 数少ないお気に入りの宝石を

窓辺に並べて置く

石達は月に浄化してもらいながら

きらきりと 笑う

愛してる

愛してる...

石達が語り続ける思い出に

ただ 唇の端を上げて 微笑みを返すだけ

満月は

女性の魅力を高める力があるというから

今は 泣いたりしないで

存分に月の恩恵を身に染み込ませたい

次に訪れる 恋の為に

耳と胸を透る

---

涼しい風が よぎっただけ

街の中

ふたりで聴いた 歌

涼

---

想えど片恋

きみ

冷製の果実

## 夏川柳

---

君のキス とろける私は かき氷  
Kimi no Kiss Torokeru watashi-ha Kakigoori

君無くば 波に漂よう 一枚貝(字余り)  
Kimi-naku-ba Nami-ni tadayou Itimai-gai

氷中花 君と巡りて 返り咲く  
Hyoucyu-ka Kimi-to megurite Kaeri-zaku

魅了

---

その瞳が 罪です

その声が 悪です

その 仕草が

痛みです...

妙味

---

珈琲の底に大粒のShugrシュガー

溶けながら 苦味をほんのり和（やわ）らげる

なんだか

私の気持ちに気づかないくせに

胸をくすぐる あなたみたい

## ミルク満たして

---

あなたを疑った あの時

私の中も外にも 霧が 満ちた

まるで 深いミルクの中の迷子

甘い愛を

手放したくなくて 泣く子供

苦い涙を

飲み込む前に ほどけた誤解

私の小さな嫉妬と

あなたの大きな抱擁

混ぜ合わせたなら

今度は

吐息が

深い ふかい 霧に変わる



ちかづきたい

---

どうしたのって 訊いていいかな

遠くから あなたを想いはじめてた

声をかけたくなる 踏み出したくなる

あなたを想うだけで あたたかくなる

この距離が いいって わかってるのに

カサカサ音をたてて落ちる枯葉が

こころの乾きを 素直じゃない自分を笑ってるみたい

笑われるなら

あなたが いいな

# 風化

---

気の抜けたソーダのように

表面の削れたカメオのように

棄ててしまいたい記憶だった

あなたの視線は 空風(からかぜ)のように

意地とプライドを吹き流し

埋めていた灯火を 色づける

まだ あなたの腕に包まれたい

言うには既に遠過ぎる人

彼方の時間 馴染んだ肌は化石だと...

一瞬交わした瞳に 告げられた

私は泡

削れゆく破片

時間と共に 風化 する...

## 紅葉

---

寒さに耐え切れず  
大地に暖を求め  
木々の葉が堕ちる

温もりを求めて あなたと手を繋ぐ  
包まれたこの手が 小さく想えた  
一端の交叉が 指先も頬をも熱くする

息が  
切れてしまったの

もしも あなたが 立ち止まってくれたなら

自分の歩調で私を歩かせる為に  
手を繋いでいなければ

今年も

紅葉降るこの道を  
あなたと一緒に  
歩き続けていたのかも知れない

## Noise

---

甘く噛まれてキスされて  
封印された 耳

誰が彼の悪口を言おうと  
嘘偽りの ノイズ

忠告は 破滅の呪い  
擦れ合う愛の邪魔になるだけ

耳を塞ぎ 歩き続ける  
ぬかるんだ道の行く末に

悪夢が見えるまで

えんまん

---

君の指 瞳に鼓動を 操られ

眠れない 逢いたい逢いたい 夜が更ける

標(しるべ)無い 長き道程 寄り添って

ほろよい

---

華と香と ふくむ喉へと めぐる熱

ほのか潤い 月 涙形

## 冬風

---

凜凜たる冬帝の

黒き衣に

氷の如く輝く星々

彼の何れかは

既に在りもしない

過去の光

逡巡と胸に埋めた

在りし日の炎も最早(もはや)

夜の雲の如くに

霞む温もり

満点の星を仰ぎ

凍ってしまう不意を恐れて

孵(かえ)らぬ卵

訪れぬ再会

蠢爾(しゅんじ)たる想いを

繰り返し 抱(いだ)きなおす

仄かな奥の燻(くすぶ)りが

唯一の 暖

ひとり夜の 冬風

## 宵闇通り

---

あなたの瞳に 映る景色が  
たとえ 夕焼けでも

私の瞳に映る景色は  
ライトアップされていて

光の洪水に溺れるの

あなたを 掻き抱いて沈みたい

しどけない姿が  
羨望の波となって 押し寄せる

さよならを 交わさないまま  
引き千切られた 想いは

ふらふらと  
風になびき 絡む場所を探す

蜘蛛の

糸のように

今も

宵闇を 彷徨い続ける...



# Sepia

---

たとえ

迷っても

この道を歩きたくは なかった

別れを告げられた

冬の窓辺の椅子に

今は

笑顔の恋人達が座る

街路樹のイルミネーションに

距離感を惑わされ

行き着いた先は

夢

ならぬ

喜劇

闇の中の記憶が

うっかりと

浮き上がり

黒く塗り潰した想いが

涙で溶けて

セピアカラーのふたりを

ほんのりと

映し出した

イルミネーションの輝きは

靄(もや)へと変わり

私の

未来(さき)を妨げる

## 六花

---

灰色の雲から

はらはらと 咲く

重い雲から

軽やかに ひとひらの六花（りっか）

手の平に落ちて また落ちて

ふたひらが重なり

違和無く 溶けた

あの頃の

私達のように...

自嘲

---

不思議ね

貴方を

絶ち切れる日が

今は

貴方よりも

恋しい...

ひとりごと

---

あの日

乾いたrouge(ルージュ)が言ったの

「きっと、やり直せるから...」

あの時

彼は 振り向きもしなかった。

白い息に巻き込まれた言葉は

霜が張りつき

重い願いは

彼の背中に届く前に

アスファルトに落ちて

砕けてしまった...

永遠の 愛

語る唇に 嘘は無くとも  
明日を測れぬ言葉は  
薄き 一葉(いちよう)

小川の 水面

吹き渡る風は 時さえ運び  
広がる大海の誘(いざな)いに  
震う 哀の兆し

墮ちゆく 砂

形成した物 砕けた愛  
壊れた理由を拾おうとも  
残るは 欠片

この身も 心も

散る為に 開いた  
儂き  
桐の

一葉 ——

## Lover

---

赤い糸 絶えても愛し 幸祈る

Akai-ito Taetemo-itoshi Sachi inoru

## 月語り

---

白曇りの灯火

瑠璃の魂(たま)を巡る

遥か久遠の

標(しるべ)なき 約束

語らずとも

添うが

悠久の

至福

☆☆☆

白曇りの灯火 = 月

瑠璃の魂 = 地球

☆☆☆

▼クリックが励みになります▼(1日一回有効)



アルファボリス  
Webコンテンツ